

大学におけるオリンピック・パラリンピック教育の普及過程に関する研究： 当事者の「語り」の分析を通して

Research on the process of integrating Olympic and Paralympic Education at University:
By analysis of the “narrative”

岡田 悠佑（明治学院大学心理学部，早稲田大学スポーツ科学研究センター）
土屋 陽祐（明治学院大学教養教育センター）
根本 想（育英大学教育学部）
乳井 勇二（育英大学教育学部）

抄録

本研究の目的は、大学におけるオリンピック・パラリンピック教育の普及過程を、当事者の「語り」の分析を通して明らかにすることであった。そこで、東京都内のX大学でオリンピック・パラリンピック教育の普及を試みた教員A氏を対象に、ライフストーリー法に基づいてオリ・パラ教育の普及に関する「語り」を協働で構築し、オリンピック・パラリンピック教育の普及に対する「意味づけ」の分析を試みた。その結果、A氏がオリ・パラPJに対して【学生の主体的な学びの場】と【学内のスポーツ環境の整備】という2つの意味づけを行っていたことが明らかになった。そして、X大学におけるオリンピック・パラリンピック教育の普及は、このようなA氏による意味づけが機能したことで実現した可能性が示唆された。

1 緒言

1. オリンピック・パラリンピック教育の普及の理念と困難

2021年に東京で開催されたオリンピック・パラリンピック競技大会（以下、東京大会）では、レガシーの創出という理念^{注1)}を実現するためにオリンピック・パラリンピック教育（以下、オリ・パラ教育）の全国規模での普及が目指された（オリ・パラ教育に関する有識者会議，2016）。そして実際、東京大会に向けて様々な組織がオリ・パラ教育の普及に取り組み、全国各地で実践が実現したことが報告されている^{注2)}。

一方で、このような日本におけるオリ・パラ教育の普及について、先行研究では過去のオリ・パラ教育の取り組みを踏まえた実現可能性に対する批判（佐野，2018）

や、教員の負担等の問題（宮崎，2019；岡田ほか，2018，2020）が指摘されてきた。そのため、オリ・パラ教育の普及過程の検討を通して、オリ・パラ教育を東京大会後も継続的に実現していくための要因を探索する研究も行われてきた。ここでは、オリ・パラ教育の普及の担い手となった小学校の校長や教育委員会の担当者、さらには外部講師を担ったアスリートが、オリ・パラ教育を普及することに対する独自の「意味づけ」を見出しながらオリ・パラ教育の実践を実現してきたことが明らかにされている（岡田，2021，2023；岡田ほか，2023）。ただし、これらの先行研究で指摘されている通り、オリ・パラ教育の普及過程は多様であり、様々な状況でオリ・パラ教育の普及の担い手がどのような意味づけをしてオリ・パラ教育の普及を実現したのか、という点の検討は重要な課題である。

2. 大学への期待と先行研究の不足

東京大会に向けたオリ・パラ教育の普及は、先行研究で検討とされてきた初等・中等教育機関だけでなく高等教育機関も対象としていた。東京大会組織委員会は2014年6月に日本全国の大学・短大約800校と「大学連携協定」を結び（日本オリンピック委員会，2014）、大学生に対して「大会を盛りあげる」ための観客やイベントへの参加だけでなく、「大会をつくる」ための運営への協力等の役割への期待が示された（東京大会組織委員会，online）。オリ・パラ教育に関する有識者会議の報告書でも、「学生に対する教育においては、各大学の状況や学問分野の特性等も踏まえながら、オリンピック・パラリンピックに関する教育が幅広く行われることが期待される」（オリ・パラ教育に関する有識者会議，2016，p. 16）と示された。そして実際に、全国の大学生と意見交換するための「地域巡回フォーラム」や、オリ・パ

ラ大会をアレンジしたイベントやクイズ等のブースを学園祭で開く「Tokyo2020学園祭」等の実践が大学で実現した（東京大会組織委員会, online）。

ただし、このような高等教育機関である大学におけるオリ・パラ教育の普及は非常に困難であったと考えられる。実際に、上述した協定は結んだものの、「未だに多くの大学・短期大学がどのような活動を展開したら良いか模索している状態にある」（舩本ほか, 2018, p. 58）という報告がある。その要因として、初等・中等教育段階におけるオリ・パラ教育の普及が基本的に教育委員会やスポーツ庁等の支援（予算の配分, 教員研修, 情報提供等）を受けながら推進された一方で、大学にはそのような支援がなかったことがあげられる^{注3)}。つまり、オリ・パラ教育の普及に取り組むことやその普及の具体的な方針は各大学及びその担い手の裁量に委ねられており、それゆえにオリ・パラ教育の普及の要因として重要なオリ・パラ教育に対する意味づけや、具体的な計画の策定及び実行に必要な資源が不足していた可能性が推察される。しかし、大学におけるオリ・パラ教育を対象とした先行研究では、主に学校への支援の取り組み（友添ほか, 2018, 2019；深見ほか, 2021）や実践の報告（木村, 2015；木村ほか, 2019）しか行われていない。前述の通り、期待の大きさを踏まえると、大学におけるオリ・パラ教育の普及過程の検討は重要な課題と言えよう。

3. 目的と意義

本研究では、大学における東京大会に向けたオリ・パラ教育の普及過程を、その担い手となった当事者の視点から明らかにすることを目的とする。東京大会後に出された第3期の「スポーツ基本計画」では「我が国におけるスポーツの在り方については、ひとえに、東京大会開催を通じて得られた『スポーツ・レガシー』を、どのように継承・発展していくのかにかかっていると看做すでもない」（文部科学省, 2022, p. 18）と明記された。そのため、東京大会に向けたオリ・パラ教育の普及がどのように実現したのかという課題は、今後のオリ・パラ教育の普及の可能性と限界を検討するうえで重要である。

II 方法

1. ナラティブ・アプローチとライフストーリー法

上述の通り、先行研究では、オリ・パラ教育に対する「意味づけ」がオリ・パラ教育の普及の重要な要因であることが指摘されている。そして、このような特定の現象や経験に対する「意味づけ」を理解するうえで有効な方法として、先行研究で採用されているのがナラティ

ブ・アプローチである。この方法は、インタビューの場における当事者の「語り」を研究者が積極的に解釈しながら、協働で「現実を組織化」（野口, 2002, p. 23）するアプローチであり、政策の普及過程をその担い手の視点から捉え直す方法として、その有効性が示されている（浅井, 2019；田中, 2011）。そこで本研究では、このようなナラティブ・アプローチの1つであるライフストーリー法を採用した。ライフストーリー法では、「人は自分の人生を最初から最後まで完全に語ることはできないから、その人生で意味があると思っていることについて選択的に語る」（桜井, 2002, p. 60）という前提に立ち、「個人が歩んできた自分の人生についての個人の語るストーリー」（桜井, 2002, p. 60）を、インタビューの場における「対話的混合物」（桜井, 2002, pp. 30-31）と捉え、特定の経験に対する意味づけを探索する方法である。「主観的リアリティ」（桜井, 2002, p. 40）を重視する方法であることから、データの信頼性を高めるために「手続きの『透明性』」（桜井, 2002, p. 39）の担保、特に調査者がインタビューの場に持ち込む研究枠組みを事前に提示することや語り方への配慮をしたり、「語り」に矛盾が生じた場合はその都度確認をとることで、「物語」の「内的一貫性」を確保することが求められる（桜井, 2002；白松, 2019）。

2. 調査概要

本研究では、開催都市である東京都内のX大学で、オリ・パラ教育の普及に取り組んだA氏（教員）に調査を依頼した。

前述のオリ・パラ教育の方向性を示した有識者会議の報告書では、高等教育機関におけるオリ・パラ教育の実践として、一般教養科目でのオリ・パラ大会への理解を深める学習機会やボランティア等でのオリ・パラ大会に関わる人材の育成、さらには学外の多様な人々に対する学習機会の提供等が求められた。X大学では、2017年に「X大学オリンピック・パラリンピック・プロジェクト」（以下、オリ・パラPJと略す）を立ち上げ、2021年までの5年間で、以下の実践を実現した（表1）。そして、このようなオリ・パラPJの発起人で、X大学におけるオリ・パラ教育の普及を中心的に担った人物がA氏である。

研究の遂行にあたって、まず筆頭著者の所属する大学の倫理審査で承諾を受けたうえで、A氏に対して文書で研究への協力を依頼し、合意を得た。そして、事前に上記の本研究の枠組みを説明したうえで、2023年8月から9月にかけて対面でインタビュー調査を2回実施した（1回目48分56秒、2回目55分25秒）。インタビューでは、オリ・パラPJの準備段階から実践の実現過程で、A氏

表1 X大学における実践内容

実施年度	主な実践内容
2017	オリ・パラPJ キックオフミーティング Tokyo 2020 学園祭（東京大会組織委員会と共催） ポッチャ体験会（教育PJ）
2018	留学生交流会（国際交流PJ） 学園祭でポッチャ体験会 車いすバスケットボール体験会 おもてなし講座（国際交流PJ） Tokyo 2020 学園祭（東京大会組織委員会と共催） Legacy Forum 学園祭でオリ・パラブースを出店（大学施策PJ） 五輪勉強会（国際交流PJ） アスリート講演会 留学生クリスマス交流パーティー（国際交流PJ）
2019	学園祭でバラスポーツ体験会 おもてなし講座・観光案内ボランティア（国際交流PJ） 学園祭で「学生×アスリート×ファッション」のイベント（大学施策PJが他大学と共催） オリ・パラ大運動会（教育PJ） 渋谷区でゴミ拾い（ボランティアPJ） ゴールボール体験会（教育PJ） 小学校でバラスポーツ体験会（教育PJ） 学園祭でオリ・パラブースを出店（大学施策PJ） おもてなし講座・観光案内ボランティア（国際交流PJ） 小学校でブラインドサッカー体験会（教育PJ） 茅ヶ崎市で海岸清掃ボランティア（ボランティアPJ） パナソニックセンター見学会（ボランティアPJ）
2020	東京2020大会 ディベート大会（大学施策PJ） オリパラ動画選手権（国際交流PJ） 障がい者対応を学ぶ会（ボランティアPJ・大学施策PJ） 「オリパラ開催地下調べ」発表会（ボランティアPJ） SNS企画「日常の平和の祭典」（広報部）
2021	オリ・パラWeek オリ・パラ展示会 IOC講演会&クイズ大会 パラアスリート講演会 東京大会期間中の運営ボランティア

がどのような取り組みを行ったのか、その過程でオリ・パラ教育に取り組むことにどのような「意味づけ」をしたのかを中心に回答を求めた。そして、インタビュー調査で得られた「語り」を元に筆者がライフストーリーを作成し、A氏に確認を依頼しコメントをもらうという手順を繰り返して、データの内的一貫性を高めた。なお、ライフストーリーの原文は「」, 概念は『』, A氏の発話は「A:」, インタビュアー（筆頭著者）の発話は「O:」, 筆者による補足は「()」, 省略は「…」で表記した。なお本研究では、類似する現象を理解するための新たな仮説や分析視角を提示するために単一事例の検討

を行った（ロバート, 2011）。

III 結果

1. 実行委員会の発足

X大学は、他の大学と同様に東京大会の開催が決定後、大学連携協定^{註4)}を締結していたが、学内における具体的な取り組みはあまり見られない状況が続いた。

〈語り1〉

O: そもそも何がきっかけで、プロジェクトが始まったんですか？

A: 僕がアメフトの部長やあって、アメフトのマネージャーで4年生の学生で大学院進学をするBさんがいて、すごく優秀で、私が呼んで、「Bさん、オリパラの委員会つくるぞ」という話から始まって。そして、次に親しくしていた先生が面倒みていたCさんっていう学生がいるんですけど、それバレー部の女子なのよ。バレー部もかかわってたから、そして、Dさんっていう国際（関係の学部）の学生、その3人に相談して、「何かやらない?」って。そこから始まったんです。

O: 何かできないかな? それとも何か明確にこれをやろうという相談だったんですか?

A: とにかくオリンピック招致が決まった、東京だし。「そこにかかわったのやりたいんだけど、どうだろう?」という感じ。(そしたら)「そうですね」って。

A氏は、主に体育実技やスポーツ関係の教養科目を担当する傍ら、複数の運動部の部長も務めていた。それらの業務を通して出会った学生に声をかけたのがきっかけで、オリ・パラPJの実現に向けた実行委員会が発足した(『意欲や志のある優秀な学生の選抜』)。

ただし、このようなA氏の働きかけは、単に上述した協定を具現化することに動機づけられていたわけではなかった。

〈語り2〉

A: まず、オリ・パラを始めるにあたって、私自身のX大学の中でのスポーツとか健康だとかということについてどう考えているかっていうところをお話しておいたほうがよいと思ひまして。

O: このプロジェクトの動機につながる(ことですか)?

A: まさに、根っこにある私の主題です。・・・(スポーツに関する)自分の考え方みたいなのを学内に広めていきたい。・・・そういうことをずっと考えていて、・・・生涯スポーツのススメということで(学内誌で)連載させてもらったんですよ。・・・運動やっている人たちが練習終わって汗かきながら授業に出ていくとか、教職員がトレーニングセンターを使って空いている時間に健康づくりをするだとかをできたらいいなという。それがまず原点なんです。

このようにA氏は、オリ・パラPJの発足以前より、生涯スポーツの理念が学生や大学で働く人たちの生活の質を高めることに貢献できる、という考えを持っており、このような考えを広めたいという思いがオリ・パラPJの発足に向けてA氏を動機づけていた(『生涯スポーツの実現への思い』)。

2. 具体的な活動内容の募集

実行委員会を発足することは決定したが、具体的な活動内容についてA氏は明確に決めていなかった。そこでA氏は、自分が担当する授業の受講生を対象にアンケートを実施した。

〈語り3〉

A: プロジェクトどうするかということについては、私がスポーツ科学の理論をもってたので、結構(受講生の)人数多かったんで、授業の中でアンケートをとったんです。(東京大会に向けて)「どういことをやったらよいと思いますか?」みたいなそんなアンケート。

O: 一般学生に?

A: そう。母数にしたら300とか400とかだと思うけど。そこから似たものを抽出して5つのプロジェクトを提案して・・・概要がざっくり決まった。

O: 学生に聞くのは大事ということですよ?

A: これ結構大事なことだよ。こっちの想いだけじゃなくて、X大学にいる学生たちが、運動部入っているか入っていないかは関係なく、その学生たちがオリンピックをどう捉えているのか、オリンピックに対してどういう想いを抱いているのか、そしてX大学の学生としてオリンピックにどう関わったらよいのか、という質問を出して、そこから出てきたものを抽出して、集めたのがこのプロジェクト。

このような学生へのアンケート調査を通して、以下の5つのプロジェクトに取り組むことが決定した(表2)(『学生のニーズを尊重した活動内容の選定』)。

3. 参加学生の募集とマニュアルの作成

具体的な活動内容が決まった段階で、A氏を含む実行委員会は、オリ・パラPJに参加する学生の募集を始めた。

〈語り4〉

A: それでこういうメンバーを集めるのに、代表の学生が学内に募集かけて一人一人面談したの。・・・やる気があるのかとか、なぜやりたいのかっていうことを入社面接のようなものをして、ふるいにかけたの。

O: ちなみに、何人くらい応募がきたんですか?

A: 何百人の話だったよ。それがきて、ふるいをかけるのが大変だったっていう。17年に募集かけたときに100人は超えてたと思う。・・・そんな感じで、これがメンバーたちが考えたマニュアル。これもよく考えて学生たちが作ったなと思って。

このように、オリ・パラPJの発起人となった学生が

表2 5つのプロジェクトの概要

1) 大学施策プロジェクト
・他大学や各所方面との窓口となり、主体となって連携・活動する ・チャペルや施設の貸出を計画する
2) 国際交流プロジェクト
・自らが留学生と交流し、異文化理解を深め、国際交流をより強いものにする ・上記で得たことを発信するイベントの企画・実行をする
3) 教育プロジェクト
・子どもたちに①大会競技を知ってもらい、②異文化や多言語を知り、外国人を歓迎できるようになってもらう、③日本の文化やしきたりを学び「おもてなし」とは何か考えてもらうイベントの企画・実行をする
4) ボランティアプロジェクト
・企画したボランティアを通して、たくさんの人が交流し、つながり、さらにTokyo2020や日本文化について多くの人に関心・興味を持ってもらう ・国籍など関係なく、誰もが気軽に参加できるボランティアを企画・実行をする
5) 情報発信プロジェクト
・TwitterやFacebook等を通じて団体の活動やTokyo2020のことをより多くの人に知ってもらうことを目的に活動する ・SNSの更新や外部団体、メディア等の取材対応も行なう

応募してきた学生を対象に1人ずつ面談を実施して参加学生を決定した。

しかし、実際にオリ・パラPJが進んでいくと、活動に積極的でない学生も出てきた。

〈語り5〉

O：学内でメンバーが増えていきますよね。でも、ある程度選抜をしていたんですか？

A：当然、当然。毎年それを学生が面接をして入れてっていうその繰り返しをやって。

O：最初は維持できるけど、だんだん難しくなる気もするんですけど、問題も起こったりとか？

A：問題は結構山積で。結局、名前が入っているけど活動してないとか、ミーティングにこないとかどうしようかということでも随分悩んでいたみたいよ。それで出席管理をちゃんとしようとか、そういうことで、何回以上来ない学生委員については外しましょうということも学生が決めてやっていった。

O：学生たちで何とかなるものですか？

A：あくまでも大人というか教員が「こうしろ、ああしろ」っていうのは最初のきっかけ（づくり）はやったけれども、アイデアは出したけれども。あと広げていったのは最初のリーダーの3人。あとから男子のバレー部が入ったりして、5人くらいかな。そのメンバーで作っていったのが、だんだん形を変えながら色々なことをやってくれたっていう、そんな流れです。

このように、A氏は、オリ・パラPJの運営をあくま

表3 マニュアルの内容

I. 団体について
1. 全体目標
2. 組織図
3. 役職一覧
4. 各プロジェクト照会
II. 活動について
1. 活動における基本の3本柱
2. 参加について
3. 情報発信について
4. 連絡手段使い分け
5. 報告・連絡・相談について
6. 企画の通し方について
III. 諸資料について
1. 学生が作成・提出する資料一覧
2. 資料体裁

で学生の主体性に任せる姿勢を維持し続けた。一方で、実行委員会の委員達は上記の参加学生の動機の多様化に対してマニュアルを作成して、オリ・パラPJに参加する学生間の意思疎通を図ろうとした(表3) (『意思疎通のツールとしてのマニュアルの作成』)。

4. オリンピック・パラリンピックPJの承認

A氏は、学内でこのような組織づくりの取り組みを行うと同時に、大学に対してオリ・パラPJを立ち上げることの許可を得る必要があった。しかし、A氏は他の先生方がオリ・パラPJの発足に賛成してもらうことに苦慮

することを予測して、次のような方針で交渉を試みた。

〈語り6〉

O:「プロジェクト実行委員立ち上げます」みたいな
のって、先生たちにも理解されないといけないで
すよね？それとも勝手にやっていいものではない
ですよね？

A:ない、もちろん予算とか金だしたりがあるんで。

O:その理解は簡単ではないですよね？

A:それは当然あった。当時はやっぱり否定的だった
んですよね。でも、学生たちがある程度はしらせ
て、実態をどんどんつけていって、学生部なり、
保証人委員会なり、社会連携課みたいなところに
「こういうのをやりたいんで、少し協力してもら
えませんか？」っていう話を。

このようにA氏は、活動実績をつくりそれを元に他の
教員に対してオリ・パラPJの立ち上げの許可を求め、
承認を得ようと試みた（『活動の実態を根拠とした説
得』）。

5. 学内組織への協力の依頼

オリ・パラPJの立ち上げの承認を得たA氏は、次に
活動予算の獲得に向けた取り組みとして、オリ・パラ教
育に関する授業の立ち上げとボランティアセンターとの
連携に取り組んだ。1つ目のオリ・パラ教育に関する授
業の立ち上げについて、A氏は自らが担当する既存の授
業の内容をオリ・パラ大会に関連する内容に変更しようと
試みた。

〈語り7〉

O:予算をとろうと思ったときに「何でやるのか」
「何をやるのか」「それでよいのか」といったこと
が起こっていると思うんですけど・・・

A:執行部にはいないけど、学部フロアには（反対の
人が）いたよね。・・・具体的な話でいくと、オリ
ンピック講座を正課の授業で作ったじゃない。
それから1年くらい遅れてパラリンピック講座も
正課の授業でつくったんだよ。・・・そこで（授
業の）開講の趣意書だとかを教授会に出したとき
に猛反対された。「X大学でオリンピックだとか
を授業でやる必要ない。」と。

このように、活動予算を獲得するための取り組みの一
つとしてオリ・パラ大会に関する授業を立ち上げようと
試みたが、他の教員から批判的な意見が出た。このよう
な批判的な態度は、2つ目のボランティアセンターとの
連携においても同様であった。

〈語り8〉

A:X大学のボランティアセンターあるじゃない。オ
リパラプロジェクトで学生たちがボランティア

やってる、だから「一緒にやりませんか？」って
何回誘いかけてもダメなの。なんでか、わからな
いんだよ。オリンピックに関わるボランティアは
汚らしい、復興だとかそういうボランティアは
美しいみたいな。そういう印象だったよ。だった
らさ、パラリンピックだけのボランティアでもい
いんじゃないの？と思ったんだけど。

O:そこまでおれたんですか？

A:うん、「一緒にやりませんか？」って。ボランティ
アセンターが学校にあるんだから。でも全然ダメ。
結果的に、1つ目の授業内容の変更は認められたが、
2つ目のボランティアセンターとの連携は実現しなかつ
た（『学内組織の協力と抵抗』）。

A氏は、このようなオリ・パラ教育に取り組むことに
対する批判的な態度の原因について、次のように考察し
ている。

〈語り9〉

A:ややもすると、このオリ・パラPJが囲んでて他
者を受け入れないように思われてしまったのか
も。決してそうじゃないんだよ。

O:当時、メンバーだけで肩組んで誰もいれないぞっ
て見えちゃってるかなってという問題意識はありま
したか？

A:やっぱりボラセンとの話のときにそれを感じたよ
ね。一緒に手をつないでやろうということ拒ま
れたりしたときには、「あれ？オリ・パラって独
特のこう組織として見られているのかな」って。

このようにA氏は、学内組織との連携がうまくいかな
い中で、学内におけるオリ・パラPJに対する批判的な
見方が強いことを認識していった（『東京大会のネガ
ティブなイメージ』）。

6. 既存の制度の活用

オリ・パラPJの活性化に向けた学内組織への協力の
依頼と失敗という事態に直面したA氏は、別の方法を用
いてオリ・パラPJに関わる理解を求めた。

〈語り10〉

O:同時に、先生は色々な働きかけをしているわけで
すよね・・・発足の当初は（他の教員や組織に）
あまり理解されないのが普通かなと思うんです
が・・・

A:その頃は副学長をやっていた時期の前後で、大学
の執行部に入り込んでたから、そういう顔があつ
たんだよ。それプラス、スポーツプロジェクト
を立ち上げてそれがずっと学内で動いていたわけ。

O:それは何ですか？

A:スポーツプロジェクトが同時進行に動いてて、そ

これからオリンピックが決まって、2本目としてこういうのが動いていた。だから、学内的には「A先生はスポーツ大好き人間だから」みたいな感じで、「予算をつけてください」ってお願いしてっていうのが立ち上げの時期。

ここで言うスポーツプロジェクト（以下、スポーツPJ）とは、2000年代前半にA氏が中心になって立ち上げた学内の運動部の活動を活性化するために特定の運動部に予算を加配する取り組みであった。A氏は、このようなスポーツプロジェクトとの連続性を強調することで、学内におけるオリ・パラPJの活性化を図っていた（『代替制度の活用』）。

IV 考察

1. 【学生の主体的な学びの場】という意味づけ

A氏がオリ・パラPJの活動において、終始一貫して重視していたのが学生の主体性であった。オリ・パラPJの立ち上げは、A氏が元々関係性のあった『意欲や志のある優秀な学生の選抜』を契機としており、その内容もアンケートを活用して『学生のニーズを尊重した活動内容の選定』によって決定した。さらに、参加学生が増えると同時に消極的な学生も増えていく中でも、立ち上げ時のメンバーによる『意思疎通のツールとしてのマニュアルの作成』によって対処していった。このように、ややもすると学生任せの無責任な姿勢のように見えるリスクや、学生だけでは解決できない問題が生じて活動が停滞するリスクがありながらも、A氏は学生の主体性を尊重する姿勢を示し続けた。つまり、A氏はオリ・パラPJを【学生の主体的な学びの場】として意味づけていたことが推察できる。中央教育審議会（2018）の答申「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」では、高等教育において今後の社会展望に対応して「生涯学び続ける力や主体性を涵養」し、「学修者が自らの可能性を最大限に発揮する」ことが期待されている。そして、このような方針を実現するためには、学習の場で「できるだけ自分の頭で考えて言葉にして外に出させる」という「学生に任せる部分」と、「指導や助言を入れる部分」の両面を含む授業が求められる（溝上、2014、p. 154）。つまり、A氏が学生の主体性を尊重する姿勢を示し続けたことは、近年の高等教育の方向性につながる重要な指導であったと理解することができる。

このような意味づけは、A氏がオリ・パラPJの立ち上げの許可を得る際に『活動の実態を根拠とした説得』を行ったことから推察できる。もしオリ・パラPJが大学の教育活動として不適切な場合に承認を得られない可能性が高いことから、『活動の実態を根拠とした説得』

は回避するであろう。学内における『東京大会のネガティブなイメージ』が強い状況においてはなおさらである。つまりA氏は、上述の近年の高等教育の方向性の理解の有無は別として、学生の主体性を尊重してオリ・パラPJに取り組むことが、大学における教育活動としても適切であると認識していた、と考えられる^{注5)}。

2. 【学内のスポーツ環境の整備】という意味づけ

A氏は、オリ・パラPJを広げていくために、他の学内組織に連携を依頼して断られたことで『東京大会のネガティブなイメージ』を認識した。そこでA氏は、学内の教員らにオリ・パラPJへの理解を求めるために、もう一つの方法として『代替制度の活用』を試みた。具体的には、オリ・パラPJの意義を2000年代にA氏を中心に始められた運動部の活動の活性化を目的としたスポーツPJの取り組みと関連づけて説明することで、オリ・パラPJへの理解の促進を試みた。このような『代替制度の活用』という方法は、新しい教育政策の普及に伴う担い手の負担を軽減し、普及を促進する有効な方法であり（富田、2015）、オリ・パラ教育の普及過程に関する先行研究においても既にその効果が明らかにされている（岡田、2021、2023）。そして、A氏が代替制度として活用したスポーツPJが学内の運動部の活動の活性化を通じた学内のスポーツ環境の整備を目指した活動であったことを踏まえると、A氏はオリ・パラPJに対して【学内のスポーツ環境の整備】という意味づけをしていたことが推察される。

V 結論

本研究の目的は、大学におけるオリ・パラ教育の普及過程を、当事者の「語り」の分析を通して明らかにすることであった。その際、東京都内のX大学でオリ・パラ教育の普及を試みた教員A氏を対象に、ライフストーリー法に基づいてオリ・パラ教育の普及に関する「語り」を協働で構築し、オリ・パラ教育の普及に対する「意味づけ」の分析を試みた。

その結果、A氏がオリ・パラPJに対して【学生の主体的な学びの場】と【学内のスポーツ環境の整備】という2つの意味づけを行っていたことが明らかになり、X大学におけるオリ・パラ教育の普及は、このようなA氏による意味づけが機能したことで実現した可能性が示唆された。

なお、本研究の知見は、単一事例を対象に検討した結果であり、あくまでA氏の経験に即した検討であることから、一般的な知見を提供しうるものではないが、このような本研究の限界を認識しつつも、大学におけるオ

リ・パラ教育の普及の促進方法に関して仮設的に示唆を得ることが可能であろう。1点目は、担い手としての学びの場となることの重要性である。先行研究では、アスリートが、オリ・パラ教育の実践の外部講師を務めることに対して学びの場という意味づけをしていることが明らかにされている（岡田ほか，2023）。このような意味づけは、本研究におけるオリ・パラ教育の普及の担い手となった大学生においても同様である。大学生の学びを促進するうえで授業外の課外活動が重要であることも踏まえると（溝上，2009）、オリ・パラ教育も担い手となる大学生にとっての学びの場となるような方法が有効であると考えられる。2点目は、既存のスポーツ環境の改善につながるものの重要性である。先行研究では、オリ・パラ教育の担い手となる教員が、既存の教育活動と関連づけたり、得意な教科やクラスの課題と関連づけたりすることで、負担を軽減しながらオリ・パラ教育の普及を実現したことが明らかにされている（岡田，2021）。しかし、大学では、学習指導要領のような授業における学習内容を規定するものはない。そのため、既存のスポーツ環境として、体育関係の授業や運動部の活動と関連づけることでオリ・パラ教育の普及を促進することが可能となると考えられる。

ただし本研究では、当事者と著者が協働構築した「語り」を分析するライフストーリー法を用いてA氏の「語り」を中心に検討したが、学生や他の教員といったオリ・パラPJを取り巻く他の人々の「意味づけ」は十分に検討できなかつた。オリ・パラ教育の普及の直接的な担い手であった学生やA氏が協力を依頼した教員がオリ・パラPJにどのような「意味づけ」を見出したのかといった点の検討は、大学におけるオリ・パラ教育の普及過程を多元的に理解するうえで重要な課題と言えよう。また、本研究では、オリ・パラ教育の普及に取り組んだX大学1校を対象に検討したが、他の高等教育機関におけるオリ・パラ教育の普及過程の検討を通して、オリ・パラ教育の普及の成否に影響する条件の検討も求められよう。今後の課題としたい。

注

注1) オリ・パラ教育の方向性を示した有識者会議の報告書では、オリ・パラ教育の意義について、東京大会への機運醸成だけでなく、東京大会後の有形・無形のレガシーの創出に向けた重要な取り組みであることが示されている（有識者会議，2016，p. 1）。

注2) 東京大会組織委員会がオリ・パラ教育に積極的に取り組む学校の認証制度である「よいい、ドン！スクール」には、最終的に19,005校が登録した（東京

大会組織委員会，online）。また、スポーツ庁の「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」では、全国46の道府県・政令市が事業に参画した（スポーツ庁，2022）。他にも、東京大会の関連企業がオリ・パラ教育に関連する映像教材の提供等を実施した（岡田，2020）。なお、本研究では、岡田ほか（2023）に基づいて、制度や理念の広まりを「普及」、具体的な実践が行われることを「実現」と表現する。

注3) このような方針は、オリ・パラ教育の柔軟性を意味すると同時にその独自性を喪失しかねないというジレンマを抱えることも意味していた（岡田，2023）。

注4) 大学連携プログラムは、各大学と東京大会組織委員会が個別に協定を結んで展開された（藤原，2017）。

注5) 【学生の主体的な学びの場】という意味づけは、学生に受け入れられていた可能性が高い。というのも、前述した、立ち上げ時のメンバーによって作成されたマニュアルの「はじめに」では、活動を通して「たくさん刺激をもらってください。たくさん自分を高めてください。同時に自分の行動一つ一つが周りにどんな影響を与えるのか考えながら活動してください。」や、「ぜひ自分が社会人になったとき、親になったとき、“あのときとても誇らしいことを経験していたんだな”と思えるような充実した体験を、この団体を通して積み上げてください。」と述べられているからである。

文献

- 浅井幸子（2019）学校改革・学校づくりの経験をナラティブ探究で解明する。秋田喜代美・藤江康彦編、これからの質的研究法。東京図書，pp.273-290。
- 中央教育審議会（2018）2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）。https://www.mext.go.jp/content/20200312-mxt_koutou01-100006282_1.pdf。（参照日2024年3月11日）
- 深見英一郎・吉永武史・岡田悠佑・劉素雲・木浪龍太郎・青木彩葉（2021）2019年度早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センターにおけるオリンピック・パラリンピック教育の取り組み：セミナー及びワークショップを中心に。スポーツ科学研究，18：27-38。
- 藤原庸介（2017）オリンピックと大学連携。https://www.ssf.or.jp/ssf_eyes/history/olympic_legacy/06.html（参照日2024年4月1日）
- 木村華織（2015）イベント型オリンピック教育「とう

- かく競技祭」の実践. 東海学園大学教育研究紀要, 1: 53-71.
- 木村華織・黒須雅弘・田中望・永野翔大・出口順子 (2019) 大学生を対象とした参加体験型オリンピック・パラリンピック教育の学習効果. 日本体育学会予稿集, 70: p.72.
- 舩本直文・小林勝法・後藤光将・師岡文男 (2018) 2020年東京大会のレガシー形成に寄与する大学間連携のあり方に関する総合的研究. 大学体育学, 15: 57-62.
- 宮崎明世 (2019) 学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の展開と評価. 体育学研究, 64: 855-868.
- 溝上慎一 (2009) 「大学生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討. 京都大学高等教育研究, 15: 107-118.
- 溝上慎一 (2014) アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換. 東信堂.
- 文部科学省 (2022) スポーツ基本計画. https://www.mext.go.jp/sports/content/000021299_20220316_3.pdf. (参照日2024年3月12日)
- 日本オリンピック委員会 (2014) 大学生のパワーを東京五輪に. <https://www.joc.or.jp/news/detail.html?id=5514> (参照日2024年4月1日)
- 野口裕二 (2002) 物語としてのケア. 医学書院.
- 岡田悠佑 (2020) 日本におけるオリンピック・パラリンピック教育の可能性と限界. 現代スポーツ評論, 42: pp.137-143.
- 岡田悠佑 (2021) 日本におけるオリンピック・パラリンピック教育の普及過程に関する研究. 体育学研究, 66: 343-360.
- 岡田悠佑 (2023) オリンピック・パラリンピック教育の普及過程における教育委員会の機能に関する研究. 東京体育研究, 15: 17-24.
- 岡田悠佑・根本想・乳井勇二 (2023) オリンピック・パラリンピック教育としての体育・スポーツアウトリーチ実践の実現過程. スポーツ教育学研究, 43 (2): 15-33.
- 岡田悠佑・友添秀則・深見英一郎・吉永武史 (2020) 教員の視点から見たオリンピック・パラリンピック教育の促進方法に関する研究. スポーツ教育学研究, 40 (2): 31-50.
- 岡田悠佑・友添秀則・深見英一郎・吉永武史・根本想 (2018) 日本におけるオリンピック・パラリンピック教育の促進方法に関する研究. 体育学研究, 63: 871-883.
- オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議 (2016) オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて最終報告. https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/004_index/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/07/29/1375094_01.pdf. (参照日2024年4月1日)
- ロバート：近藤公彦訳 (2011) ケース・スタディの方法. 千倉書房.
- 桜井厚 (2002) インタビューの社会学. せりか書房.
- 佐野慎輔 (2018) オリンピック・パラリンピック教育は必要か. 現代スポーツ評論, 38: 98-106.
- 白松賢 (2019) 解釈学的アプローチによる教師研究の可能性. 教育社会学研究, 104: 279-299.
- スポーツ庁 (2022) スポーツ庁委託事業 オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開2016-2021年度 総括報告書. https://www.mext.go.jp/sports/content/20220331spt_oripara-300000904_02.pdf (参照日2024年4月1日)
- 田中昌弥 (2011) 教育学研究の方法論としてのナラティブ的探求の可能性. 教育学研究, 78 (4): 77-88.
- 東京大会組織委員会 (online) 東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会公式報告書. <https://www.2020games.metro.tokyo.lg.jp/taikaijyunbi/houkoku/officialreport/index.html>. (参照日2024年4月1日)
- 富田知世 (2015) 「進学校」制度の普及過程に関するミクロレベル組織分析. 教育社会学研究, 96: 283-302.
- 友添秀則・深見英一郎・吉永武史・岡田悠佑・根本想・竹村瑞穂・小野雄大・青木彩葉 (2018) 2017年度早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センターにおけるオリンピック・パラリンピック教育の取り組み：セミナー、ワークショップ及び全国フォーラムを中心に. スポーツ科学研究, 15: 64-76.
- 友添秀則・深見英一郎・吉永武史・岡田悠佑・東海林沙貴・竹村瑞穂・根本想・小野雄大・梶将徳・青木彩葉 (2019) 2018年度早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センターにおけるオリンピック・パラリンピック教育の取り組み：セミナー及びワークショップを中心に. スポーツ科学研究, 16: 14-25.

連絡責任者

住所：〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37

氏名：岡田 悠佑

電話番号：03-5421-5405

E-mail：okadayusuke69@gmail.com